

## わたしたちにとって知識とは何か

### ——「知識人」論と近代批判——

高橋 在也（東京学芸大学連合大学院・博士課程）

十五年戦争期の日本において、学者・書店主といった知識人階層の家族・親戚のあいだで、同人誌をつくって詩・哲学論・エッセイを書いて読みまわすといったことがあった。それは、言論の自由が徹底的におしつぶされた社会において、言葉のやりとりをするなから精神が自由に動ける空間を創設する営みであった。こうした営みは、今まで「戦時下抵抗」という言葉で概括されることが多かったが、むしろ、わたしは知識が独特な仕方でも生成する現場として興味深く考えている。それは、ひとりの知識人ないし思想家が熟考してある思想に達するというモデルではなく、相互作用のなかでメンバーに思想の核のようなものが宿るというものである。

こうしたつながりのなかで思想を形成するという経験は、知識人とは何かという議論のなかでは、どのように扱われてきたのだろうか。これが本発表の主題である。まず、E.サイド『知識人とは何か』を中心に、知識人とはどのような存在として語られてきたかを概括する。サイドは、A.グラムシ、J.バンダの知識人論らを挙げながら、マイノリティの声を代表して表象し、権力とたたかう知識人像を提出する。しかしながら、彼の知識人像は、基本的にたたかう個人であり、つながりのなかの思想形成という側面については捨象されている。次に、日本の戦時下における知識人の内面の自由を題材にした加藤周一「戦争と知識人」を検討する。加藤は、精神の自由を確保するためには、天皇制にまみれた生活世界から超越した価値観（マルクス主義、キリスト教など）を保持している必要性があったと説明するが、これはサイドを裏書するような孤立した知識人像である。知識人は、戦時下という時局の外圧によって孤立させられたのか。確かにそれは事実である。しかし、それだけではなく、そもそも「知識人」という集団と言葉がうまれた近代以降、知識や思考とはつねにひとりの空間で生まれるという前提がなされてきて、知識人にとって連帯は副次的なものであり続けたのではないだろうか。つながりのなかの思想形成という経験は、たとえ経験されるにせよ、そしてその経験が大きいものであったにせよ、その重要性は見過ごされてきたのではないか。

本発表の問題関心は、鶴見俊輔ら、思想の科学研究会やサークル研究の問題提起をひきつぐものだ。近代社会が知識生成の場所をどのように局限してきたのか、知識人みずからが知識の生成や思考のうまれる経験をどう認識してきたのかを問う作業の一プロセスとしたい。